

忙しすぎる子ども、忙しすぎる先生 カリキュラム・オーバーロードとは

「不登校」はなぜ激増に転じたのか

いま、「不登校」(※注)の子どもたちが激増しています。2023年の調査では中学生の25人に1人と、どのクラスにも不登校の生徒がいるほどの数です。

不登校はなぜこれほどまでに増加したのでしょうか。

「多様な教育機会確保法ができて、『必ずしも学校に行かなくても良い』という考えが広がった」

「コロナによる休校の影響」など、様々な意見があります。

もちろん、それらも一因ではあるでしょう。ただ、注目したいのは文部科学省ホームページに掲載されているグラフです。2012年を境に不登校は顕著に増加に転じています。これは、教育機会確保法(2017年)やコロナ(2020年)では説明がつかいません。

だとすれば「2012年に日本の教育に何かがあったのではないかと疑ってみることが必要でしょう。

その「何か」を考える前にもうひとつ見てほしいグラフがあります。

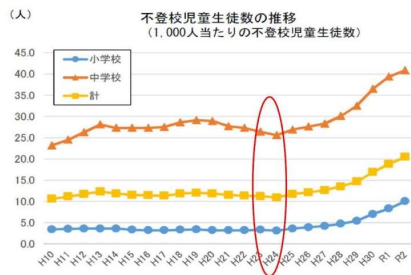
子どもたちの不登校の増加と二つです。これは何でしょうか。

このグラフは、「精神疾患で退職

した先生の数の推移」のグラフなのです。

つまり、いまや日本の学校は子どもにとっても先生にとっても「通うのが辛い場所になってしまっている」ということなのではないのでしょうか。

(※注)「不登校」なのか「登校拒否」なのかという論議があるが、ここでは「不登校」という一般的呼称を用いる



▲不登校児童生徒数の推移

ターニングポイントは何か

2012年になにがあったのでしょうか。思い当たるのは「ゆとり教育」があたかも諸悪の根源のように言われ、学習内容を大幅に増加させた「学力」重視の新学習指導要領が本格実施された年、ということです。

世論は「学力向上」一色に染まりました。この結果、学校で教える内容は約1割増しに増え、教科書もその分厚くなりました。「重すぎるランドセル」などが問題とされるようになったのもここからです。



でも……「覚える内容を増やせば学力は向上する」のでしょうか？ かえって勉強について行けず、ドロップアウトせざるを得ない子どもが増えてしまうのではないのでしょうか？ そんな疑問は「学力向上」一辺倒の論調の前に省みられることはありませんでした。

しかも、それだけでは終わりません。2020年度からは小学校英語が導入されました。

この小学校英語は「スクラップ&ビルド」ではなく、「ビルド&ビルド」で導入されます。理科とか国語を英語に置き換えたのではなく、授業時間をさらに1時間増やしたのです。その結果、小学校高学年の子どもたちは連日6時間目まで授業がある、ということになってしまいました。

一方、教える側の先生はどうだったでしょう。

担当する授業時間が増えたのに、先生数は増えていませんでした。その結果、先生一人あたりの授業の持ち時間が増えました。もともと多忙だった先生たちはもっと多忙になりました。これでは悩み事を抱えた子どもがいても、丁寧に寄り添う時間も余裕も減ります。

学校の教育内容が過度に多すぎてキャパシティを越えている状態を「カリキュラム・オーバーロード」と言います。

日本の学校教育は、子どもにとっても先生にとっても、まさに「カリキュラム・オーバーロード」になってしまっているのではないのでしょうか。

「競争主義」で何が起きたか

授業が「詰め込み」になっただけではありません。この頃から学校にも「競争主義」が持ち込まれるようになり、「学力テストの成績の公表」「学校選択制」など、いわゆる新自由主義的な教育「改革」が日本の教育界を席卷しはじめます。

しかし競争主義は（嫌な言い方ですが）「勝ち組」と「負け組」を生みます。日本が「学力向上」一色に染まり、競争主義に染まった結果、それについていけない子どもが増えていったのではないのでしょうか。

実は国連の子どもの権利委員会も日本の状況を懸念して、次のような勧告を日本政府に行っていたのです。

過度に競争主義的な環境による否定的な結果を避けることを目的として、学校制度および学力に関する仕組みを再検討すること。……（これが）いじめ、精神的障害、不登校・登校拒否、中退および自殺につながることを懸念する。

日本の教育は、懸念の通りになってしまいました。

秋田の小さな村の学校で見たもの

子どもや先生に過重な負担を強いている「カリキュラム・オーバーロード」をあらためるには、学習指導要領を改訂して学習内容を削減する必要があります。

しかし、これには保護者の皆さんから「それでは学力が『低下』してしまうのではないか」との懸念が寄せられるかもしれません。

そもそも「ゆとり教育で学力が低下した」という言説には疑問があることを、私は昨年「ゆとり教育再考—ゆとり教育で本当に学力は低下したのか—」というレポートにまとめました。興味がおありでしたら、ぜひそちらもご覧ください。

この「学力向上」について、私のこんな経験をお話したいと思います。

私は以前、「学力テスト全国1位」だった秋田の、さらに県内トップという村を訪ねたことがあります。その村は、奥羽山脈の中にある小さな村でした。

私はこの村を訪ねて、先生に聞きました。

「いったい何をされたんですか？ テストの結果を成績順に廊下に張り出すとか、放課後の特訓授業とか、塾通いとか……」そう聞くと、先生は笑いながら「そんなこと、一切ありません。」とおっしゃるのです。

ただ、ひとつだけ心がけたことがあるそうです。それは「授業がわからない、学校がつまらないという子どもをなくそう」と努力したことだったそうです。

そのために、先生たちはわかりやすく、楽しい授業

づくりに力を入れました。

子どもたちもみなとても仲が良く、もし勉強が遅れている仲間がいたら皆で教え合うのだそうです。

「競争」ではなく「学び合い」でした。

その結果、何が起きたのでしょうか。

私たちは学力の分布というと、54321という凸形の分布を思い浮かべるかもしれませんが、しかし日本の子どもたちの実際の学力分布を調べると、「双こぶラクダ型」と言われる形を示します。つまり学力の高いグループと低いグループに

「二極化」しているのです。

学力低下と言いますが、トップグループの子どもたちは依然としてきわめて高い学力を維持しています。一方、勉強につまづき、意欲をなくしているもう一群の子ども

たちがいます。だから、全体として「平均点」が下がるのです。

秋田の小さな村の学校は、この意欲をなくしているグループの子どもたちが「勉強がわかる」「学校が楽しい」と思ってもらえるようにしたのです。だから、「平均点」が上がったのです。

もし「双こぶラクダ」型の分布をしている子どもたちに「競争」を強ければどうなるでしょう。成功体験を持つトップグループの子どもは、競争の結果さらに向上するかもしれませんが、でも、勉強がわからず意欲をなくしている子どもたちに競争を強ければ、どうなるでしょう。その子たちはますます意欲をなくし、学校からドロップアウトしていくだけです。

村の学校の先生はこうもおっしゃいました。「この学校では、時間がゆっくり流れているんです」

私がこの学校で見たのは、まさに「ゆとり教育」でした。その結果としての「学力向上」だったのです。

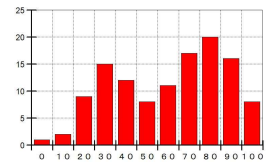
ちなみに、この村の学校には不登校の子どもは一人もいませんでした。

「カリキュラム・オーバーロード」の解消を

昨年の10月、文科省の有識者会議は次期の学習指導要領に関して、「教育内容の過重負担」の改善について論議したそうです。ようやく「カリキュラム・オーバーロード」の問題が認識され始めたのです。

財務省が頑として教職員定数の改善や教育予算増額を認めようとしなければ、その意味でも指導要領を改訂して学習内容を精選するしかありません。

ぜひ、早急に論議を進めてほしいと心から願います。



▲学力の二極化

